

新刊紹介

小峯和明編著

『日本文学史 古代・中世編』

大貫 真実

本書は日本の古代・中世文学の生成と展開、さらはその魅力の源流に迫る文学史である。従来から文学の中心と見なされてきた作品（例えば『万葉集』、『源氏物語』、『平家物語』など）だけではなく、絵画や歴史物語、古典注釈なども含めたより幅広い領域にも踏み込み、新たな文学史の構築を試みたものとなっている。

本書の構成は以下の通りである。

はしがき——文学史の醍醐味

序章 古代・中世文学の世界 小峯和明

第I部 古代の文学

第一章 概説 小峯和明

第二章 記紀・風土記 斎藤英喜

コラム1 祝詞・祭文 増尾伸一郎

第二章 万葉集 多田一臣

コラム2 仮名文字 神田龍身

第三章 古今集と平安和歌 錦仁

コラム3 屏風歌と絵 岡崎真紀子

第四章 平安前期物語と日記 川村裕子

コラム4 紙と書物 浅田徹

第五章 源氏物語と平安後期物語 小嶋

菜温子・馬場淳子

コラム5 手紙・消息 竹村信治

第六章 漢詩文・漢文学 佐藤道生

コラム6 口伝と聞書 菊地仁

第七章 日本霊異記から今昔物語集へ

千本英史

コラム7 紀行・巡礼 大橋直義

第II部 中世の文学

中世の文学 概説 小峯和明

第八章 新古今和歌集と中世和歌 渡部

泰明

コラム8 唱導・談義 渡辺麻里子

第九章 説話集と法語 荒木浩

コラム9 寺社縁起 恋田知子

第十章 歴史物語と歴史叙述 深沢徹

コラム10 中世神話 渡辺匡一

第十一章 平家物語と太平記 鈴木彰

コラム11 未来記 原克昭

第十二章 お伽草子と絵画 宮腰直人

コラム12 五山文学 堀川貴司

第十三章 歌謡と連歌 小野恭靖

コラム13 琉球文学 島村幸一

第十四章 能狂言と語り物 小林健二

コラム14 キリシタン文学 小峯和明

第十五章 古典の注釈と学芸・学問 前

田雅之

古代中世文学史年表 長谷川範彰・目黒将史

人名・作品索引

このように、本書は大きく「第I部 古代の文学」と「第II部 中世の文学」の二部構成となっており、それぞれの冒頭に「概説」が配置されている。「序章 古代・中世文学の世界」では「文学とは何か」という問いや、これからの文学史研究のあり方についての提言が示されており、このような問題意識は本書に通底するものであると言えよう。以下、各章の内容を大まかに見ていきたい。

第一章は『古事記』『日本書紀』、そして

同時代に作られた『風土記』の位置づけを、それらが作られた時代を見直すことで捉え直し、作品をいかにして読むのかについて分析している。第二章は『万葉集』について、巻十六、巻十四（東歌）、巻二十（防人歌）の三つの「特異な巻々」と、『万葉集』の表現史において、重要な役割を果たしたとする柿本人麻呂の二つの観点から論じている。第三章は最初の勅撰集である『古今和歌集』の仮名序・真名序の和歌思想の源と、その思想が『古今和歌集』以降の和歌に継承されていくことを明らかにし、平安時代の和歌史を概観している。

次の二つの章では、平安時代の物語文学と日記文学が扱われる。まず、第四章は平安時代に花開いた作り物語、歌物語、日記文学、そして随筆といった作品群の代表的な作例を挙げ、叙述形態や表現といった基礎的知識の確認に主眼を置きながら、それぞれの作品が後世に与えた影響についても言及している。第五章は『源氏物語』の虚構性とその意義について、物語論、準坵論、物語史といった観点から論じ、さらに虚構性を「詩的言語の革新」として評価することで、虚構世界の成り立ちと和歌的な表現

世界の交渉について述べている。また、『源氏物語』以後の平安後期物語については、『狭衣物語』『夜の寝覚』『浜松中納言』の三作品を挙げ、院政期に成立した後続作品への影響にも触れながら論じている。

第六章ではとりわけ漢詩文が扱われており、平安時代の詩史の展開を知るための一例として、平安時代を通じて流行したという句題詩を挙げ、その構成方法の展開について分析している。そして、第Ⅰ部を締めくくる第七章では、『日本霊異記』から『今昔物語集』までの説話集の展開を、仏教という観点を中心に据えながら、神仙思想を背景に持つ説話や、『大和物語』などの「歌語り」、『俊頼髓脳』や『袋草紙』といった歌論書の「説話集」としての側面にも言及している。

続いて第Ⅱ部へと移る。第八章は中世の和歌史について、鎌倉時代前期の勅撰集『新古今和歌集』から戦国時代の和歌までに言及し、宮廷の公家の表現手段であった和歌が、地域的、階層的に伝播していく様子、和歌の言葉の機能などに着目しながら論じている。第九章は『古今著聞集』の本文をはじめ、中世の「説話集」が仮名の

和文で書かれることに着目し、「説話集」の「文学芸術としての自立」や作者性の顕在化、また、祖師の談話の聞書である法語について、「随筆」へのつながりを含めて論究している。

続く二つの章は、「歴史を語る」という点において、特に関連し合っているといえる。第十章は「歴史叙述」と「物語」は地続きであるとして、『栄華物語』から『神皇正統記』までの「歴史物語」の流れを、歴史を叙述する「ことば遣い」に焦点を当てて考えている。第十一章では『平家物語』、そして『太平記』が辿ってきた過程を通史的に把握し、それらの諸本の生成のあり方などについて、本文の「継承・変容・再生」に主眼を置いた分析がなされている。

この後の章からは、文学と芸能の結びつきに焦点が当てられていく。第十二章は十四世紀から十八世紀初期までのお伽草子の歴史を、絵画メディアや芸能との関連に着眼しながら辿り、読者の存在や出版文化の隆盛といった享受の問題にも言及している。第十三章は中世歌謡の流れを今様・早歌・小歌を中心に、その周辺の歌謡にも触

れながら述べる。また、連歌についても平安時代の短連歌から長連歌、さらに「俳（誹）諧連歌」を経ての俳諧までの営みを説明する。続く第十四章は世阿弥によって大成される以前の能からそれ以降の能までのつながりを、宗教劇、歌舞劇、そして人間劇への展開として述べ、能とともに上演されていた狂言の歴史や、室町期に流行し戦国大名に好まれた幸若舞曲にも触れている。

そして、本書の最終章を飾る第十五章は、古典注釈を「学問（継受と批判）」と思想表明が時に一致する営為」とし、中世を「注釈の時代」として捉え、その実態と担い手たちについて、「古今伝授」以前と以後に大きく分けて論じている。本章は古典とはいかなるものなのかという問題意識において、これまでの章全体を包んでいるとも考えられるのではなからうか。

以上、第一章から第十五章までを概観してきたが、本書の特徴のひとつとして、各章の間に挟まれたコラムの存在を挙げておきたい。冒頭で本書はより幅広い領域に踏み込んだ文学史であると述べたが、これらコラムが本書の内容をより多彩なものとし、文学史に対する多角的なアプローチを提供しているといえよう。

し、文学史に対する多角的なアプローチを提供しているといえよう。

編者は「本書は最初から最後まで秩序立てて構成されているが、どこから読み始めてもいい、あちこち気の向くまま拾い読みでもいい、読み方はそれぞれの自由である」と「はしがき」で述べている。本書は通読することで日本の古代・中世文学史を大系的に把握することはもちろん、自身の興味・関心に従いながら文学の魅力に触れ、その豊かな世界への入り口を見つけることにおいても絶好の書である。また、本書には編著者である小峯和明氏をはじめ、立教大学に関係のある多くの研究者が執筆者として参加している。学内外を問わず、ぜひ多くの方に手に取っていただきたい。

(二〇一三年五月 ミネルヴァ書房 A5
判 四二六頁 三八〇〇円)
（おおぬきまみ 大学院博士前期課程在学学生）

小峯和明編

『日本文学史』

大石 将也

「文学史」は「文学観」と「歴史観」が相互に絡み合うことで成立する、と編者は述べている。本書は今までのどの読み方にも当てはまらない、新しい文学史の捉え方を試みるものである。具体的には、時代でもジャンルでもなく、テーマで文学史を捉えるという方法であり、「実験的で問題提起的な方位を目指し」た内容である。

目次は、以下のとおりである（カッコ内は各章・コラムの執筆担当者）。

新しい文学史のために（小峯和明 本学名誉教授）

I 東アジア漢文文化圏と日本の文学史（小峯和明）

①日本古典の誕生 ②東アジア世界をつなぐ古典

コラム1 変貌する神話―記紀から中世神話へ（金英珠 韓国外国語大学校日本語大
学非常勤講師）

II メディアと文学（竹村信治 広島大学
大学院教育学研究科教授）

①「メディア」？ ②言葉 ③声 ④文
字 ⑤「文字」と「メディア」の行方

コラム2 絵解きと出版（宮腰直人 明治
大学兼任講師）

III 戦争と文学（鈴木彰 本学教授）

①「戦争と文学」という視座 ②「古代
の戦争」と文学 ③「中世の戦争」と文
学 ④「架空の戦争」と文学 ⑤戦争を
めぐる観念と実践―戦争と文学の関係史
へー

コラム3 朝鮮軍記・薩琉軍記・島原天草
軍記（目黒将史 日本学術振興会特別研究
員）

IV 宗教と文学（小峯和明）

①宗教と文学 ②宗教と言葉、文学
③宗教の表現史 ④神祇、神道と文学
⑤御霊信仰、修験道、陰陽道他 ⑥キリ
シタン文学の世界

コラム4 唱導・孝養（金英順 本学兼任
講師）

V 男女、家族と文学

①王朝文芸に見る女性と結婚（小嶋菜温
子 本学教授）

（1）かくや姫誕生―結婚の物語のはじ
まり（2）『落窪物語』から『源氏物語』
へ―家妻をめぐる物語（3）『源氏物語』
と（女の罪）の系譜

②性別越境の物語とジェンダー―『有
明けの別れ』がまなざす中世の文化と歴
史―（馬場淳子 元本学兼任講師）

コラム5 身体、性（吉橋さやか 本学兼
任講師）

VI 環境と文学（小峯和明）

①環境文学とは ②四季のイデオロギー
③災害の文学史 ④食文化と文学 ⑤動
植物の文学

コラム6 庭園と文学―日本庭園の（池と
中島）（安原眞琴 本学兼任講師）

あとがき（小峯和明）

本書の序文に相当する「新しい文学史の
ために」では、文学史を考えるに先立ち、
「文学とはなにか」という根本的な問いに
対する再定義を行っている。文学の守備範
囲が、従来文学として認識されていなかっ
たものをも含みこみ、拡大し続けているこ
とを確認している。そして、従来の文学史
のあり方の問題点や課題をあぶりだし、テ
ーマ割りで文学史の必要性が書かれてい

る。

続く第I章のテーマは、「東アジアと日
本」である。「東アジア」については、編
者が近年とりわけ精力的に取り組んでいる
テーマだ。本章では、漢文を母語に置き換
えて読む「漢文訓読」という言語行為が、
東アジア一帯に共有されていたことに着目
し、日本文学の様相を東アジア全体との関
わりから論じている。

第II章では「メディア」を取り上げる。
「メディア」には「媒体」「媒質」といつ
た訳語があてはまる。文学もさまざまな
「メディア」を介して伝えられ、再構成さ
れてきた。ここでは文学を構成する重要な
要素である、「言葉（声）」や「文字」に注
目し、文学がどのように知を開拓してきた
のかが明らかにされている。

第III章のテーマは「戦争と文学」だ。こ
こでいう「戦争」とは、戦場で戦うことの
みならず、「対立関係が芽生え、解消され
るまでの一定期間の社会の状態」と定義さ
れている。扱われる戦争も、歴史上実際に
あった戦争のみならず、異類や動植物によ
る（架空の戦争）や、お伽草子などにみら
れる「論争」や問答など多岐にわたる。実

に多くの種類の戦争が、どのように記録され、語り継がれてきたのか、豊富な資料を用いて様々な角度から論証されている。そして、「戦後七十年という希有なる時」たる現代をどのように語るのか、という興味深い問題も提示されている。

第IV章は「宗教」がテーマである。宗教は人間が恒常的に求めている、救いの拠り所でありつづけてきた。日本においては仏教が主流だったが、本章ではさらに神祇やキリシタンまで視野に入れて、宗教がどのように表現されてきたかを論じている。仏教における法会文芸の聴き手の視点や、キリシタン文学における教理書の翻訳といった例を通し、宗教を表現することと文学が、いかに密接な関係にあるかを痛感させられるよう。

第V章では、「男女、家族と文学」がテーマとされ、主に女性について論じられる。前半は「王朝文芸に見る女性と結婚」と題され、『竹取物語』におけるかくや姫を例に、「変化の人」という非人間性と「女の身」という人間的な属性が二律背反的であることに着目して、婚姻譚における「女の身」というキーワードの重要性を説く。さ

らに『竹取物語』で「女の身」が「罪」とリンクして語られることの意義を分析した上で、『落窪物語』や『源氏物語』を例に、家や結婚、ジェンダーという観点から、女性像を考察している。本章の後半部分では、「性別越境の物語とジェンダー」と題し、日本で異性装がすんなりと受け入れられた背景について、異性装を扱った『とりかへばや』や『有明けの別れ』などの物語作品、『歌舞伎』や現代の「宝塚」といった演劇作品を例に挙げ、幅広い視点から考察している。

第VI章では「環境と文学」を取り上げる。まず和歌や年中行事をはじめとする生活習俗との関係から、「四季」の季節感の形成について論じている。そして幻の自然空間である「四方四季」の空間を取り上げ、日本人の自然や環境に対する感情、それに根ざした美学やイデオロギーを析出している。「災害の文学史」では、海底考古学と文学の協働の様子の一端を垣間見ることまでできる。阪神淡路大震災では『方丈記』が、東日本大震災では『日本三代実録』が、それぞれ新たなリアリティを伴って甦った。そうした文学作品が何度も甦り、新し

い読み方をされながら脈々と受け継がれていく様相が、鋭く切り取られている。

どの章も文学が人間のあらゆる営みや文化を包含して成立していることを再認識させられる内容となっており、現代において古典文学を読む意義を考え、私たちを取り巻く社会や生活を今一度捉えなおすことができる。図版も多用されており、平易な文体で読みやすい。研究者のみならず、一般の読者の方々にもぜひ読んでいただきたい一冊である。

(二〇一四年十一月 吉川弘文館 B6判

三七九頁 三八〇〇円)

(おおいしまさや 大学院博士前期課程在学)

加藤定彦著

『関東俳壇史叢稿』

庶民文芸のネットワーク

稲葉 有祐

俳諧文芸の裾野は広大かつ複雑である。

俳人達は互いに緊密なネットワークを張り巡らし、中央（＝江戸）と地方とを結びつけていく。本書に取められた全十九編の論稿は、江戸を中心とした関東一円における俳諧史の究明を企図し刊行された、著者編『関東俳諧叢書』（全三十二巻・二〇〇八年完結）と平行して執筆されたものを核としており、その豊富な資料をもととして、地域の歴史・文化を丁寧に紐解きつつ、各俳壇の種々相・史的展開を明快に描き出している。

巻頭は慶紀逸没後二五〇年の記念講演録。ベストセラーとなり、川柳にも多大な影響を与えた『武玉川』の編者、紀逸の活動を俳諧史の観点から位置付ける。続く稿では阿誰・浙江・文路三代の文事を通じて、関宿・境俳壇における紀逸・宋阿の勢力圏、江戸宗匠連来遊の実態を解き明かし、蕪村

の野総漂泊・取り巻くネットワークを説く。そして、蕪村とも交流のあった潭北の新出雑俳資料の紹介へと話題は繋がっていく。

次の三編は利根川流域、水戸街道若柴宿、南埼玉を舞台とする。まず、一茶の利根川漂泊をめぐる、その庇護者、布川の月船との交流の具体相を示し、龍ヶ崎・取手・成田の俳人達にも言及、経済支援・俳諧の学習指導に止まらぬ親密なネットワークの意義を述べる。また、露川系から柳居門松露庵派、さらに同別派の多少庵派へ転向した常総連中の変遷を論じ、加えて多少庵の拠点となった南埼玉の俳壇状況へと視座を移しつつ、精力的な活動を展開した南枝（同庵三世）の事蹟を明らかにする。

「白井鳥酔資料叢稿」では、千葉県長生郡、鳥酔生家の白井家襲蔵資料から稿本『鳥酔居士句集』、その他、鳥酔・柳居らの主要な資料九点を翻刻・紹介する。

「矢さしが浦の俳壇」は四編の論稿を所収。下総国さき匝差郡蕪里の俳人玉斧の『松風庵客名録』をもとに、江戸宗匠（中央）の支援者としての地方名家という視点で定点観察することによって、柳居系俳人や涼袋、一茶との交流をはじめ、雪門、白兔園、葛

飾派の進出等、両総俳壇を巡る各派の動向を逆照射する。そして、矢さしが浦（九里浜）の俳壇を支える作者達の多くが有力な名主・地主層であり、その血縁関係を背景に旺盛な活動を展開していたことが明らかとなる。その中心人物の一人、雨林のネットワークには伊能忠敬の実父（俳号、都船）の出た名家、神保家が含まれていた。続き、同家襲蔵の俳諧資料、上総国武射郡の大名主、大高家襲蔵の『亀足集』（付索引）の紹介がある。

北毛俳壇については、沼田市、左部家さとりの資料から、同家歴代の俳諧活動を軸に論じられる。松露庵派の進出と白雄との勢力争いの構図・過程が如実に立ち現れ、その後、地元判者、書郊登場による沼田俳壇の活性化等を経て、明治に至るまでの様相が概観されている。相模原当麻、淵光の資料紹介もある。

巻尾は房総俳壇を扱う三編の論考である。一茶とも交流のある半場里丸（白兔園系採茶庵派）の活動を中心に夷隅の俳諧史が語られ、また、半場家襲蔵の『杉間集』配本控えからは南房総の俳人達の素性が判明、その俳壇勢力図を展望できるようにな

る。結びとして、著者の新収資料をもとに安房の俳壇事情が説かれる。

本書によって提示される俳諧のネットワークは、政治・経済・交通や物流、そして生活とも密接に関わり合い、地方と中央との文化交流を繋いでいく。事実に真摯に向き合い、実態に即した俳諧史を考えるにあたり、本書は必ずや一つの堅実な礎石となる。二〇一三年十一月、若草書房、A5判、四八五頁（付索引）、本体一五〇〇〇円）

（いなばゆうすけ 本学兼任講師）

石川巧編

『高度成長期の出版社調査事典 第一巻……』
『出版社要録 昭和34年度 第一篇』

仲井眞 建一

本資料集は、高度経済成長期にあたる一九五九年～一九七八年にかけて、興信所が発行した出版社調査資料八点の復刻で、全八巻が予定されている。今回取り上げるのは、その第一巻で、本書に付された石川巧「内部資料から見る出版史——『高度成長期の出版社調査事典』解題」によれば、本資料集復刻の意義は、近代日本の出版に関する史資料や文献において、死角となっている高度成長期を埋めることにある。

現代から見て最も資料的に恵まれないのが一九四五年～一九七〇年代である。例えば、出版社の数が限られていた明治期から昭和前期、厳しい言論統制のためにかえって記録が厳密に保存されていたアジア・太平洋戦争期、そして史資料のデジタル化の急速な伸張により整理・保存された一九八〇年代、以上に関して言えば資料は充分で、

また整理もされており、いくつかの図書館を調査すればアクセスは困難でない。しかし、出版解放のためカストリ雑誌が氾濫した占領期、雑誌ブームに沸いた高度経済成長期、そして各出版社が試行錯誤を続けたオイルショック後の景気停滞期、以上からなる一九四五年～一九七〇年代終わりまでの約三五年間は、それぞれが出版業界の大きな変転の時期であるにもかかわらず、データ蓄積技術の未発達、稀薄な保存意識のために現在は知り得ることのできない情報が多い。このような状況にあつて、本資料の価値は出版史上からいっても小さなものではない。提示されるデータは、同時代の出版業界を知るために少なからず貢献を果たすことになるだろう。

第一巻を紐解くだけでも、本資料が提示するデータの詳細さと、その特徴とが理解できる。そもそも調査にあたった興信所がその序に示すように、商売上の「取引」における「最も信頼され、いつも手軽に、真に取引の手引きとなるもの」となるように本資料は志向されており、提示されるデータも「創業／資本金／代表者／主要スタッフ／沿革／取引銀行／年商／従業員／仕入

先／販売方法／出版状況（雑誌等の発行部数）／出版種類の比重／社有不動産／特記事項」の以上一四項目で、出版社の企業としての側面が焦点化されているのだ。「特記事項」に記される情報はかなり突っ込んだものが多く、手元にある第一巻を少し見ただけでも、例えば光文社の欄には「1、当社と講談社とは資金的には関係無きが如く見えるが当社の生立に於て講談社と因縁浅からぬものがあり、且つ現両代表取締役とも講談社より出向して当社に入った人である」などといった、社の内情から推察される資金の流れ、経営形態をも示唆する率直な評となっている。出版事業の内幕を数値化し、データとして提示しながら、一個の企業体としての側面を明らかにし、あくまで利益追求に根ざした出版業界を提示する本資料の特徴は、否が応にも現実拘束される出版社の姿を立ち上げるだろう。また特に、大衆的な雑誌・書籍を発行した出版社のデータまでも網羅していることを忘れてはならない。一九八〇年代、漫画文化の発達などにより、書籍をこえた雑誌の売り上げを考えると、重要な情報となる。いまや出版について論じる際には無視

できない漫画出版の歴史を考えると、この資料が提示するデータは重要かつ貴重なものとなるだろう。このように本資料は埋もれ、看過されていた記録を発掘し、出版史を新たに編みなおす契機を与える。

今回取り上げる第一巻には『出版社要録 昭和34年度 第一編』が収録され、主に教科書の出版社が取り上げられている。以下が目次である。

- ・ 凡例……………6
- ・ 『出版社要録 昭和34年度 第一編』
 - ………7／教科書の部……………15／学習参考書の部……………59／大学テキストの部（高校教科書）……………227／その他の部……………307
 - ………「内部資料から見る出版史——『高度成長期の出版社調査事典』解題」……………510（1）
- ・ 出版社名索引……………494（17）
- ・ 人名索引……………478（33）

第一巻である本書には、新たに全八巻の出版社名索引・人名索引が付与されている。本稿執筆の際に多くを抛ったが、石川巧氏

による「解題」は、本資料を出版メディア史、近現代日本史、文化史、歴史社会学などの研究に資するよう位置付けるもので、よき道先案内となるだろう。以下、続刊は二〇一五年五月、二〇一六年二月に配本予定である。

本資料を読み解けば、必ずや新たな研究の視界がひらけることだろう。活用が望まれる。

（二〇一四年九月 金沢文圃閣 A5版
五一〇頁 本体二一〇〇〇円）
（なかいまけんいち 大学院博士前期課程在学）